

イネ縞葉枯病情報第1号

令和4年6月17日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

西三河地域のコムギほ場から採取したヒメトビウンカの イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率が高い

1 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査の結果

5月中旬から6月上旬にかけて県内23地点のムギ類ほ場から採取したヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査の結果、保毒虫率は3.22%（23地点112ほ場の平均値）で平年並でした（平年値：4.46%）。

しかし、西尾市、安城市、豊田市において、保毒虫率が経済的被害水準である5%以上の地点がありました（表1）。

表1 ヒメトビウンカの縞葉枯ウイルス保毒虫率
(簡易ELISA法により検定、(※)はコムギほ場畦畔から採取)

調査場所	検定虫数 (頭)	保毒虫数 (頭)	保毒虫率 (%)
弥富市 鍋田町	15	0	0.0
飛島村 新政成	15	0	0.0
西尾市 小栗町	10	1	10.0
一色町養ヶ島	10	0	0.0
吉良町荻原	10	0	0.0
和気町	20	0	0.0
小焼野町	20	1	5.0
碧南市 縄手町(※)	5	0	0.0
刈谷市 小垣江町(※)	13	0	0.0
岡崎市 在家町	30	1	3.3
安城市 寺領町	30	2	6.7
赤松町	35	2	5.7
榎前町	35	0	0.0
高棚町	20	0	0.0
里町	40	4	10.0
豊田市 榎塚東町	40	0	0.0
福受町	35	1	2.9
中町	20	0	0.0
和会町	40	0	0.0
田代町	10	2	20.0
前林町	10	2	20.0
豊川市 御津町広石	35	0	0.0
長久手市 農総試内	30	1	3.3
計	528	17	3.22



図 イネ縞葉枯病（ゆうれい症状）

2 イネ縞葉枯病について

本病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病で、ウイルスを保毒したヒメトビウンカにイネが吸汁されると感染します。

イネが本病に感染すると、葉先が「こより状」に垂れ下がり枯死します（ゆうれい症状）（図）。また、穂が出すくんだり、不稔になったりすることにより減収します。

ヒメトビウンカは、幼虫で水田周辺のイネ科雑草等で越冬します。4月上旬頃に成虫になり、ムギ畑に飛来して一世代経過し、増殖します。その後、成虫が水田に飛び込み、保毒虫がイネにウイルスを感染させます。また、本ウイルスは経卵伝染するため、保毒虫は次世代もウイルスを保毒します。ヒメトビウンカの保毒虫率が5%以上となると、イネ縞葉枯病発病株率が10%を超え、経済的な被害を与える可能性があります。

本県で栽培されている「あさひの夢」、「ゆめまつり」、「あいちのかおりSBL」、「大地の風」などは本病に抵抗性ですが、「コシヒカリ」などは感受性であるため、注意が必要です。

3 防除対策

抵抗性品種の作付けが少なく、ヒメトビウンカを対象に育苗箱施薬を実施していない地域や、不耕起V溝直播栽培で殺虫剤の種子塗抹を実施していない地域では、表を参考にして、水田に侵入する成虫と次の世代の幼虫を対象に、幼穂形成期までに本田防除を実施しましょう。

表2 イネのヒメトビウンカに対する主な防除薬剤

薬剤名	使用時期	使用方法	本剤の使用回数	IRACコード
トレボンEW	収穫14日前まで	散布	3回以内	3 A
トレボンエアー	収穫14日前まで	無人航空機による散布、 空中散布	3回以内	3 A
MR. ジョーカーEW	収穫14日前まで	散布、 無人ヘリコプターによる散布	2回以内	3 A
スタークル液剤10 スタークルメイト液剤10	収穫7日前まで	散布、無人航空機による散布、 空中散布、	3回以内	4 A
スタークル豆つぶ	収穫7日前まで	散布	3回以内	4 A
ダントツ水溶剤	収穫7日前まで	散布	3回以内	4 A
ダントツ粒剤	収穫7日前まで	散布	3回以内	4 A

IRACコードは殺虫剤の作用機構による分類を示す。

IRACコードの詳細は、https://www.jcpa.or.jp/assets/file/labo/mechanism/2021/mechanism_irac03.pdfを参照する。

農薬の散布に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。